

「ほたる」



父が亡くなった翌年の夏を僕は故郷ですごしていた。

ある夜のこと、僕は心配顔で見送る母を背にして、夜中に酒を抱え、大川のほうへと歩いた。

川原の岩に腰掛け、飲み慣れない酒を口の中へ流し込み意識がもうろうとするほど、あおった。

払えるはずもない大きな「借金」と、突然、崖から突き落とされたような「絶望」を残して自死した父への“恨み”。そして一方では優しくった父への“愛しさ”が頭の中で交錯し、混乱していた。

更に、漠とした自分も死ぬのではないかという恐怖と、漆黒の闇につつまれた自分の将来に希望をなくしていた。

川原で酔い、誰もいないことを確認して一人声を上げて泣き、疲れて少し眠ったようだった。

目が醒め、焦点の合わないままぼんやりしていると、目の端のほうに、かすかな光が灯ったり消えたりしている。

目を凝らすと、無数の光が、あたり一面に消えてはひかり、光っては消えている。

酔って目が回っているのかと思ったが、「ほたる」だった。

しばらくすると、数個の小さな光が夜空へ舞い上がったかと思うと、ほかの光達も誘われるように、いっせいに空へとものぼり、広大な蒼に広がる満天の星と、その“小さな命達”の境はなくなり、僕には星も蛍も見分けがつかなくなった。

あまりの美しさに口をあけて見上げていると、僕は、そのまま川へ吸い込まれるように落ちた。

夜中に民家の庭に迷い込んだ河童のように、ずぶぬれになって帰宅した僕を見て、母が目を剥いて怒った。

「あんたまで死んだら、おかあちゃんも、もう生きておれん」

父の死後、急にふけてしまった母は僕の足元に両手をつき土下座をするように倒れこみ、おいおいと泣き続けた。

川へ落ちたのは、あやまって足を滑らせてしまっただけで、まったく母は勘違いしたのだが、今考えると無理もなかった。僕たちの前に立ちはだかる困難の大きさをよく理解していた。

僕に「生きる力」が残っているか、不安だったのだろう。

あれからもう30年以上になるだろうか・・・仕事と金のことだけに集中し、父の死を語ることなく、辛い想いをかき消すように無我夢中で生きて来た僕は、いつの間にか父が亡くなった年齢になろうとしている。

この前、久しぶりに母に電話したら、
「まさや・・・今日は星がきれいなんよ！ 昼、よー晴れとったけんあー」
と少しボケかかった母が弾んだ声で言う。

「そういえば、あんた・・・小学生の頃、星を見とって川へ落ちた事があるんよ。覚えてる？」 そう言って屈託なく笑った。

「かあさん・・・それは小学生の時じゃないんだよ」そう言いかけたが、その言葉を飲み込んだ。

母の中で思い出は、あの時の星と“ほたる”のように、辛い人生の思い出と楽しい思い出との境がなくなり、生かされている喜びといくつかの悲しみが混在する美しい一枚の風景画となっているのだろうか。

「かあさん・・・僕、覚えてるよ。それでいいよ・・・ありがとう」

今夜、母はひとり、満天の星を見上げ、何を思っているのだろうか。
目を閉じると、若く元気だった父と母の笑いあう声が聞こえたような気がした。

岩元 雅也

リメンバー福岡自死遺族の集い 発行 Remember 便り 29号より
【リメンバー福岡のアドレス】 <http://www.rememberfukuoka.com>